

---

## 短編 4

三木拓矢

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

短編4

### 【Nコード】

N7639N

### 【作者名】

三木拓矢

### 【あらすじ】

「ねえ、あたしのこと好き？」

「んー普通だよ。嫌いじゃないけど好きでもない」

「なにそれ」

そう言って彼女は笑った。

「ねえ、あたしのこと好き？」

「んー普通だよ。嫌いじゃないけど好きでもない」

「なにそれ」

そう言っただけ彼女は笑った。

自分としては真面目に答えたつもりだったのだが笑われてしまった。

ふーむ、なんとなく自分としては面白くない。

「由梨は僕のこと好き？」

由梨。小坂由梨は一瞬目をパチクリさせ、その後キョトンとした。  
なんでそんなこと聞くの？そんな顔をしている。

「大好きで大嫌いに決まってるじゃん。なんでそんなこと聞くの？」  
「？」

実際に聞いてきやがった。

- - 大好きで大嫌い、いつも通りの答えに清々しい彼女の笑顔。  
ああそう、と僕は生返事で言葉を返した。

「なによー自分から聞いておいて生返事なんかしちゃって」

「あー、ごめん」

「別にいいよっ、許さないから」

「許さないのかよ」

思わずツツコむ僕。　こんなこと滅多にあるもんじゃない。

「今度なにか奢ってくれたら許してあげなくもない」

「回りくどい言い方は人に嫌われる」

「いいよ、君があたしを嫌いならなければね」

「僕にも嫌われるぜ」

「嘘つき」

はつきりと断言するように由梨は言う。  
僕は苦笑する。

「嫌いにだってなるだろう、人間だもの、ずっと好きなんてありえない」

「でもあたしのことは嫌いにはならないでしょう?」

「まあね」

- - たとえなにながあろうとも、由梨がなにをしようとも、僕が由梨を嫌いになることはない。

自分の意志でそう決めたのだ。

それが僕の彼女にたいする罪の償いなのだから。

「じゃあいつそあたしのこと好きになればいいのに」

「自惚れるな」

「むう」

いじける由梨。これを可愛いと思ってしまっただけ僕もまだ甘い。本人には絶対言っちゃいけないが。

「で、これからどうする？」

「人生？」

「今日」

「どうしよつか。学校ももう終わっちゃったし、放課後は何をしようかと考える日々。めんどっ！」

「面倒くさいなら僕は帰っていいよな。それじゃまた明日」

「ちよっ！ちよつと待ってよ！もうちよつと一緒にいようよー！」

……学生服のえりの後ろ部分を掴まないで欲しい。  
素直に呼吸が出来ないんですけど。

「……」

「なんとか言ってよ。……それともあたしと一緒に嫌？」

決して嫌じゃないけどお前がえりを掴むから口から言葉がでないんだよ。

- - これはもしかしたら僕には死亡フラグがたっていたりするのだろうか？

若干17歳にして友達の女の子に誤って絞殺される。

明日の新聞の見出しが決まってしまった。

「……………」

「そっか嫌なんだ……。ごめんね。あたし君の気持ち考えもしないで好き勝手なことばかり言って。嫌だったら嫌って言うてくれても良かったのに……。ううん、別にあたしは気にしてないよ、君があたしを嫌いにならなければそれでいいから。……でも、やっぱりちよっと淋しいかな」

「……………」

なんだかもの凄くシリアスな空気になっているが元をただせば由梨が僕のえりから手を話せば済むという、案外どうでもいい図である。

- - 流石に限界だったので手を振りほどいた。

「触れられるのも嫌なのね」

「違うから被害妄想は止める。由梨がさっきからずっと僕のえりを掴んで離さないから喋れなかったんだよ」

「ああ、どうりで顔が青白いなと」

「思っていたなら手を離してくれよ」

本当に僕を殺す気だったのだろうかこいつ。

「さて、じゃあせつかく君が生き返ったことだし、あそこにも行ってみようか！」

「生き返ったって、別に死んだわけじゃないけどな」

「そいじゃ行ってみようー！」

「……了解」

僕と彼女は歩き出した。

（後書き）

今回はいつもよりちょっと長いということであ…

なんだか書こうと思えば書けるような作品だなと書き終えてから  
ふと思う私

誰か一人でも続きが気になると感想を書いてくださる方がいたら  
書こうと

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7639n/>

---

短編 4

2010年10月10日15時47分発行